

大陸（北支）

北支戦線 従軍記

福井県 来馬増秀

私、大正十一（一九二二）年三月二日、福井県丹生郡織田町平等で生まれました。

昭和十七（一九四二）年四月、徴兵検査を受け、第一乙種合格でした。やがて兵種は輜重兵との通知が来ました。父が言いました「後、四カ月で兵隊に行く。今の内に早く結婚せよ」と。父の方針に従って、昭和十七年十月に結婚しました。現在の妻です。

昭和十八年一月末、博多へ集合、指定旅館へ入宿せよとの指令が来ました。指令の通り博多へ集

まると、下関へ逆戻り。関釜連絡船に乗り朝鮮釜山へ。朝鮮満州を経て北支へ。

ちよつと後戻りしますが、博多の旅館へ新婚四カ月目の妻が、私の母の弟（叔父）に連れられて面会に来ました。この叔父の妻が私の妻の姉という間柄でした。面会も慌ただしい事で、心を残しながら別れました。

私が兵役につくため家を離れた当時の我が家の状況と言えは次のようでした。

父	健在	大阪の酒屋へ勤務
母	健在	農業
長男（本人）	健在	農業
長男の妻	健在	農業
二男	死亡	若死にした

三男 健在 学生
長女 死亡 若死にした

北支派遣軍第四二二四部隊第一中隊第五班へ
(この部隊は自動車第二十六連隊でした)。一個班
に自動車が二十台ありました。第一班より第五班
までありました。第六班は整備班でした。部隊は
済南にありました。初年兵教育は済南でした。

昭和十八年七月十日、兵科幹部候補生に採用さ
れ、同日一等兵の階級を与えられました。

幹部候補生は済南の連隊本部の中にあり、そこへ移
りました。週一回の筆記試験があり、これはしん
どかった。結局は乙種幹部候補生となり原隊へ復
帰しました。昭和十八年十月十日のことでした。

昭和十九年九月一日、軍曹の階級に進む。

原隊へ帰ると、以前新兵の時、私を叩いた人が
いました。今度は私が上官になって、上下の別が
反対になったのです。「すまなかつた」とは言わな
い。私も昔の事に拘泥せぬことにして、さっぱり

とした明るい気持ちで接しました。

また新兵の頃、小学校時代の上級生が一年上に
居て私に「敬礼をせよ」と要求した者がいました。

今度は私が軍曹になったのだから、昔の仲間にな
に敬礼せよと言えないことはないが、無理に要求
をしないで自然のままにしておきました。軍隊と
は変な所である。楽に割り切った方が、苦しんだ
り迷ったりしなくて助かるのです。そのように方
針を固めてやり通しました。だから後味の悪い後
悔に責められることはありませんでした。

北支での駐留場所は洛陽に半年位、許昌には長
くいました。日常の任務は概ね兵員、糧秣の輸送
が多かったのです。車の運転は初年兵時代は行っ
たが、下士官になってからは行わず、横に乗って
いました。自動車行進も楽なことばかりではあり
ません。

その一つは米空軍の襲撃である。空襲の時はエ
ンジンを持ち、ブレーキを踏む。ある時、運転者

が空襲で頭をやられて血を流し出しました。私はその者を助手席の方へ引っ張り寄せて三角巾で頭を巻いてやり、私が運転を代わり、中隊本部へ無事帰りつき、治療をして間に合って事なきを得たことがあります。

また、空襲のため夜間無灯で走行したことも何度かありました。随分無茶なことでした。大事故に至らなかった事が何よりの事でした。

敵の戦闘機P 52の銃撃があると、畑の中（小麦が広く植えてある）を高速でジグザグ走行して難をさける。逃げるという事は恐ろしい事です。体験者でないとは分かって貰えないと思う。

時として北支で日本軍と蒋介石軍が戦う。その時、共産軍の八路軍がいると、日本軍を応援して蒋介石軍を撃っている。また八路軍と日本軍が戦い出すと、蒋介石軍は決まって日本軍を助けて八路軍を撃つという奇妙なことを再三目にしました。一体どうなっているのやら？

また、変わった任務では戦場掃除がありました。

場所、日時を協定して行うのです。日本兵の死体をトラックに積んで帰る。死体は火葬にする。認識票を確かめて外し、整理しておく。自然と部隊名も判明する。三十人位の死体を一列に並べて石油をかけて焼く。二〜三回やりました。支那軍には戦場掃除は無いのか、見えませんでした。認識票のあるのは、日本兵だけ。支那兵には無い。

夏季に薄着していて死後長く放置すると腐る。顔も崩れて不明、着衣も判定しにくくなっていきます。そんな時は、認識票を頼りにして判別する。とにかく日本兵のみを持って帰る。火葬にして遺骨にする。認識票と不離一体にして丁重に保管、慰霊の真似事もしました。明日は我が身か？ 粗末にはできぬことでした。

変わったところでは自動車にガソリンの代わりに石炭を代用として使用しました。勿論、作戦討伐の時はガソリンのみです。エンジンは同一のもので、スイッチの切り替えでやります。石炭車の方が力がありますがバッテリーがあがるので手で

回す。石炭のガスが出るまで手で回す。

〔聞取り員の村上の思い出によっても、日本内地（阪神地方）で戦争末期から戦後しばらくの間は木炭車が走っていた〕

私の一身上の事では、昭和十九年九月三十日、現役満期。十月一日予備役編入。同日臨時召集により自動車第二十六連隊応召。同日同隊編入。との軍歴になっている。

やがて昭和二十年八月十五日の終戦を迎えました。支那の現地では十五日の二〜三日前から、支那人が

「日本負けた」と語っていました。我々は敵の謀略か、スパイの飛ばす流言飛語か？ 心して乗ぜられるなど気を引き締めて、上官の指示、命令を守り、情勢の推移を見守っていました。

敵の蒋介石軍や八路軍より、投降して蒋介石軍や八路軍へ加入の誘い込みもありました。我々は心や身を堅く団結して右顧左眄せず、部隊全員、無事日本へ帰国しようと、その申し合わせを堅く

守り続けました。やがて帰国出発となり、略奪にも関わらず、貨車ではなく、客車に乗って上海へ集結しました。

昭和二十一年五月五日、日本の貨物船に乗って上海港を出帆する。五月十二日、佐世保港入港。アメリカのMPがDDTの白い消毒薬を頭から足先まで真っ白に振り掛けてくる。

同日（五月十二日）復員。日本内地を鉄道を乗り継ぎ、沿線や停車駅の焼野ヶ原と化した国土を見て、驚き入ると共に、復興再建の誓いを固めて各自の家路へと急ぎました。なつかしい我が家へ辿り着き、家族と再会し無事帰還を喜び合いました。

戦後、子宝にも恵まれ、二人の男の子と孫一人がいます。

戦後六十年を経た現在、戦争を知らぬ若い世代に伝えたいことは、平和、平和といくら口先で叫んでも駄目だ。何の資源もない祖国日本、努力、創意工夫を重ね、世界から尊敬されるすばらしい

日本を再建してほしいと念願してやみません。

私の戦記

―北支派遣軍谷第四二〇九部隊通信隊―

山形県 小笠原 清 一

私は旧山形県西置賜郡平野村九野本、小笠原家の長男として生まれました。当時の家族は両親と兄弟六人の八人で、専ら農業を主とした生活でした。平野小学校を卒業すると父に代わって、食糧増産に精を出していました。

昭和十七（一九四二）年の七月十日、兵隊検査で甲種合格となり、男子の本懐であり大変嬉しかったです。いつ入営するのかと心待ちをしているうちに、同級生（歩兵）が「俺は十二月に入営する」と言う。また同級生十人程も同じだと聞かされ、私にはまだ通知がなく、待ち遠しい毎日でした。こんなことなら早く志願をしておれば先輩として鼻高々としていられると思うと、くやしさが一段と増して来ました。